

世界史 B

幅広い基礎力がほぼ固まった。難しい設問形式にも慣れよう。

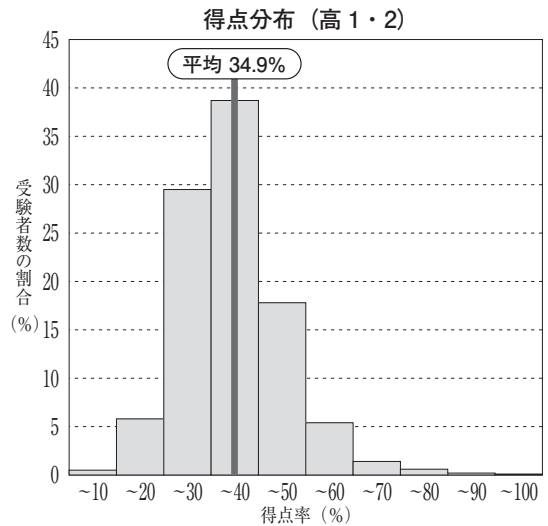
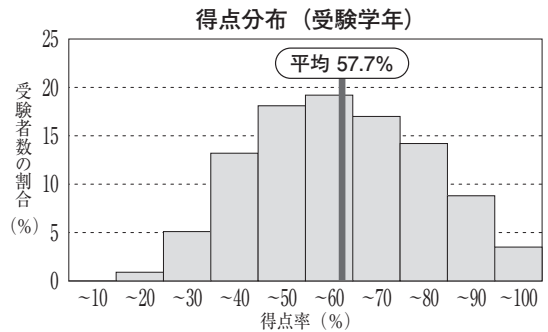
I. 全体講評

今回の全国統一高校生テストの受験学年の平均点は 57.7 点で、8 月の 50.9 点から大きく伸びた。出題した地域や時代による得点力の差はあまり見られなくなり、正答率の差は主に設問の難易度によるものになってきている。ちなみに正答率ベスト5のうち3問を近現代史が占める（第2問問1・問6、第4問問6）一方、ワースト5のうち3問は古代～近世の設問（第1問問1・2、第2問問5）となっている。また、ワースト5の残りの2問はいずれも年代整序6択問題（第1問問7、第3問問9）であり、さらに上記の古代の設問（第2問問5）は時期指定正文選択という形式なので、これらの難度の高い設問形式への対応力を高めることが今後の課題である。

他方、平易な形式による基本事項の設問であっても、予想外に伸び悩むケース（第3問問1・問2など）が見られる。既習分野であっても知識の確実な定着が不十分な箇所がまだ少なからず残されており、学力の精度を高めていくことが今後のもう一つの課題である。

高1・2生合わせての平均点は 34.9 点で、例年の全国統一高校生テストとほぼ変わらない結果であった。しかし、受験学年を上回る正答率（74.2%）を得た小問（第2問問8）もあるなど、今後の成績向上に期待できる傾向も現れている。いずれにせよ、現段階ではまずセンター試験の形式に慣れ、現時点での学力を正確に判定して今後の学習に役立てるこ

とが重要である。また設問形式などについての受験学年の弱点の傾向は高1・2生にも共通なので、それをよく意識して今後の学習を進めてほしい。



II. 大問別分析

■各学年の平均点、大問ごとの得点率

学年	平均点	第1問	第2問	第3問	第4問
高1	32.8点	29.1%	41.4%	30.1%	30.5%
高2	35.3点	32.5%	41.9%	33.1%	33.6%
受験学年	57.7点	54.1%	61.0%	57.0%	58.6%
全員	51.1点	47.7%	55.4%	50.0%	51.2%

第1問 世界の文化と思想

中国史が好調。ヨーロッパ史に関する知識の精度を高めよう。

第1問の受験学年の得点率は54.1%で大問中の最低値となった。建築様式についての盲点を突かれた問1やフランス革命・ナポレオン戦争期の年代整序6択問題の問7における低迷が響いた。ゴシック(様式)とルネサンス(様式)の組合せを正答とするリード文中空欄2箇所補充(問1)は正答率26.1%で、今回の全小問中の最低値。ゴシックについては受験者の63.9%(③と④の合計値)が正しく判定できているが、ルネサンスを正しく判定できた受験者は35.8%(①と③の合計値)に留まり、64.2%(②と④の合計値)の受験者がバロックを選択した。リード文中の「サン=ピエトロ大聖堂」が大きなヒントになっているだけに、予想外の結果であった。

プロイセン改革(a)・諸国民戦争(b)・第1回対仏大同盟(c)の年代整序6択(問7)も33.3%と伸びなかった。これら3つはいずれも基本事項であるが、設問形式の難度の影響が出た。絶対王政についてのa・b2文正誤組合せ判定(問2)も42.4%と低かった。bのヴェルサイユ宮殿については、「完成」を深読みしすぎた受験者もいた可能性がある。これら以外のヨーロッパ史では、貧困や隷属からの解放とその思想についての波線部正文選択(問3)が75.5%と高いが、判定は容易。ドイツ帝国成立の時期を選ぶ年表補充問題(問8)は60.3%、ユーゴスラヴィアを正答とする独立文中空欄1箇所補充(問9)も55.2%で、現時点としては健闘。

文字についての正文選択(問4)は83.5%で第1問の最高値、また第2問問1とともに全小問の最高値となったが、正答②の甲骨文字が漢字の原型であることの判定はきわめて容易。王羲之と顔真卿の組合せを正答とする独立文中空欄2箇所補充(問5)は66.6%、契丹人と女真人についての誤文選択(問6)も61.5%と好調であるが、判定に迷う余地は少ない。

高1・2生の第1問の得点率は32.1%で、大問中の最低値となったが、第3問・第4問とはほとんど差がない。小問では文字についての正文選択(問4)が非常に判定しやすく、受験学年と同様に第1問の最高値、また全小問の最高値ともなり、77.7%を記録した。しかし、それ以外は問5の40.2%を

除いて、すべて30%台以下の結果であった。第1問および全小問中の最低値は絶対王政についてのa・b2文正誤組合せ判定(問2)の14.1%で、同問の受験学年の正答率との差は28.3ポイント。一方、第1問で2番目に低い数値はゴシックとルネサンスの組合せを正答とするリード文中空欄2箇所補充(問1)の18.1%であったが、こちらは同問の受験学年の正答率との差は8.0ポイントと小さかった。

第2問 世界史上の女性

標準的な設問への対応力が安定。難度の高い設問の克服が課題

第2問の受験学年の得点率は61.0%で、大問中の最高値となった。金属貨幣が最初に登場した頃の出来事についての正文選択(問5)の28.7%を除いて、他はすべて近現代史ながら全体的に判定しやすい設問が多く、正答率が伸びた。この正答率の傾向は高1・2生も同様であった。問5は、金属貨幣が最初に登場した時期の理解が前提となっているので難度の高い設問である。近代史では、宣言と起草者の組合せの判定(問1)が83.5%で、第2問の最高値であるとともに全小問の最高値。アメリカ独立宣言とトマス=ジェファソンの組合せは基本事項で迷う余地はない。世界史上の女性についての波線部誤文選択(問2)も58.6%であるが、正解(誤肢)③のパナマ運河会社株とスエズ運河会社株の区別は比較的容易である。19世紀のイタリアについての独立文中空欄2箇所補充(問4)は64.5%と健闘、とくにガリバルディについては85.6%が正しく判定している(③と④の合計値)。一方、イギリスの植民地についてのa・b2文正誤組合せ判定(問9)は49.6%に留まった。b(コンバウン朝のインド帝国への併合)の判定が鍵となった。

20世紀史では、アメリカ合衆国での女性参政権実現の時期についての年表補充問題(問3)が65.2%と善戦、第一次世界大戦中の女性の社会的活躍を想起すればよいヒントになる。第一次世界大戦中のマルヌの戦いの場所についての地図問題(問6)は80.8%で、第2問で2番目に高い数値となったが、判定に迷う余地は少ない。ベトナム戦争についての独立文中空欄2箇所補充(問7)は56.1%で、現時点では健闘。ミャンマー民主化運動の指導者名(スーチー)についての正語句選択(問8)も

73.6% で好結果であるが、ニュース等の報道でよく知られる人物で、判定は容易である。

高1・2生の第2問の得点率は41.8%で、受験学年と同様に大問中の最高値であった。第2問の最低値は金属貨幣が最初に登場した頃の出来事についての正文選択(問5)の17.7%で、受験学年と同様の傾向が出ている。一方、最高値はスー=チーを正答とする正語句選択(問8)の74.2%で、これは受験学年の73.6%を上回り、全小問で唯一の逆転現象となった。この他、マルヌの戦いの場所についての地図問題(問6)も判定しやすいとはいえ、63.9%まで数値を伸ばした。

**第3問 「周辺」に位置づけられた地域・人々
東ヨーロッパ史や中国周辺史などが不安定。
補強に努めよう。**

第3問の受験学年の得点率は57.0%で、大問中2番目に低い数値であった。中国および周辺史(問4・問5)と東南アジア史(問9)の伸び悩みが響いた。中国周辺の諸民族についての誤文選択(問4)は47.6%、④の大都は基本事項であるが、チンギス=ハンとフビライ=ハンの区別が不十分である状況が明らかとなった。「新疆」を清の領土に加えた皇帝(乾隆帝)を判定する正語句選択(問5)も、やや細かい内容であることが影響して44.9%と伸びなかった。東南アジア史の年代整序6択(問9)は27.6%で、第3問の最低値であった。鄭和の南海遠征(a)が最も古いことは60.2%(③と④の合計値)の受験者が正しく判定できているので、アチェ王国の滅亡(c)の時期の理解が鍵となった。一方、同じ東南アジア史でも、比較的判定しやすい設問形式である独立文中空欄2箇所補充(問6、ベトナム史)は、81.2%と第3問の最高値となった。内容的にも都護府と大越は迷う余地がない。インド史では、ムガル帝国についてのリード文中空欄2箇所補充(問7)が77.1%と好成績であるが、平易な基本事項である。ティムールについてのa・b2文正誤組合せ判定(問8)は58.3%だが、判定に難はないので、むしろ伸び悩みの感がある。

ヨーロッパ史では、近世西ヨーロッパの出来事についての誤文選択(問1)が56.1%であるが、ステュアート朝を開いた人物がジェームズ1世であることは基本事項であり、むしろ低すぎる数値といえてよい。東ヨーロッパにおける再版農奴制を正答と

する独立文中空欄1箇所補充(問2)も基本事項ながら50.5%と伸び悩んだ。ラテンアメリカ諸国の独立についてのa・b2文正誤組合せ判定(問3)は64.6%で、基本事項とはいえまずまずの出来である。

高1・2生の第3問の得点率は32.7%。57.7%まで伸ばしたベトナム史の問6以外は30%台以下に低迷した。しかし、ベトナム史という学習が遅れがちな分野で善戦したことは、今後の成績向上に明るい展望を与える一要素といえる。一方、東南アジア史の年代整序6択(問9)は19.2%で、第3問の最低値となったが、受験学年でも苦戦しており(高1・2生との差は8.3ポイントと小さい)、現時点ではやむを得ない結果である。

**第4問 海洋の歴史
古代ギリシア史・ロシア史で健闘。知識の確
実な定着に努めよう。**

第4問の受験学年の得点率は58.6%で、大問中で2番目に高い数値であった。第4問は最低値の問7でも44.1%であり、極端に低い数値がなかったことが特徴である。東アジア史では、16世紀後半に即位して明を統治した皇帝(万暦帝)についての正語句選択(問7)が上記のように44.1%と伸び悩んだ。万暦帝自体はやや細かいが、消去法で十分に正答が得られる。江南地方の出来事についての年代整序6択(問8)は54.9%と、難度の高い設問形式にしては健闘した。太平天国(a)と南京条約(c)の年代関係の判定が鍵となった。琉球と台湾についてのa・b2文正誤組合せ判定(問9)も、判定しやすい内容とはいえ、62.4%と善戦した。

ヨーロッパ史も全体としては健闘した。ビザンティウムとエフェソスの組合せを正答とするリード文中空欄2箇所補充(問1)は、51.2%で伸び悩んだ。ビザンティウムについては95.5%(③と④の合計値)の受験者が正しく判定できおり、エフェソスとニケーアの区別が鍵となった。プラトンについての誤文選択(問2)は70.1%で、第4問で2番目に高い数値であったが、判定は容易。モスクワ大公国についてのa・b2文正誤組合せ判定(問4)も、基本事項ながら64.3%と善戦。スウェーデンについての誤文選択(問5)は内容がやや細かく、47.9%と伸び悩んだ。ロシアの南下政策についての独立文中空欄2箇所補充(問6)は78.7%まで伸ば

し、第4問の最高値を記録したが、ギリシア独立戦争とクリミア戦争はいずれも迷う余地がない。イスラーム世界では、ウマイヤ朝の都の名前とその地図中の位置の組合せ(問3)が55.6%であったが、イスラーム史では定番的な問題であり、むしろ伸び悩みの感がある。

高1・2生の第4問の得点率は33.2%。受験学年でも善戦したモスクワ大公国についてのa・b2文正誤組合せ判定(問4)が、46.0%と第4問中の最高値となった。琉球と台湾についてのa・b2文正誤組合せ判定(問9)も43.3%と、第4問中で2番目の数値を残した。一方、既習範囲のはずである古代ギリシア・ローマ史の問1では28.1%と低迷しており、学習済みの分野における知識の確実な定着に大きな課題を残している。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆受験生及び既に受験勉強に励んでいる人へ

(1) 現時点の学力を正確に把握しよう

どのような模試であれ、模試は受けた後の活用の方が大切である。現時点での学力を客観的に分析し、本番に向けての学習計画に反映させることが肝要である。模試を通じて学習するということを実践してほしい。

(2) 基本事項の確認を徹底しよう

センター試験では様々なテーマのリード文にもとづいて設問が出されるが、各小問自体は教科書レベルの基本事項が大半である。もう一度よく基礎を確認し、ムラのない学力の養成に努めよう。

(3) タテとヨコの学習の融合を図ろう

まず教科書を基本に各地域のタテの歴史の流れを確実に把握することが大前提であるが、この学習を終えた後は、同時代の世界の出来事を整理するヨコの学習に力を入れよう。時期指定問題や年代整序6択問題は頻出であり、タテとヨコを合わせた学習の整理が不可欠である。その際、重要事項については年号もともに覚えておくことが非常に効果的な対策となる。

(4) 立体的な学習に努めよう

地図や図版などを用いた設問もセンター試験で頻

出である。すでにこれらを参照しつつ学習を進めてきたこととは思うが、まだ弱点と感じられる時代や地域の地理的・視覚的把握に万全を尽くそう。また、文化史もセンター試験で頻出の分野。美術などは図版問題の格好の出題分野である。文学や学術その他の面についても、政治や経済、社会との関連の中で事項を整理することが効果的である。

◆これから本格的な受験勉強に取り組む人へ

(1) センター試験の形式・内容を把握しよう。

現時点の得点をとくに気にする必要はなく、まずセンター試験がどのような形式・内容であるかをよく知ることが大切である。本番のセンター試験ではリード文が教科書ではあまり見慣れないものである場合が少なくないが、個々の設問は教科書レベルの知識で十分正解できるものなので、決して恐れる必要はない。何よりも幅広くムラのない基礎的知識が根本的に重要である。

(2) 学習計画に沿って基礎力を固めよう。

高3生での急速な成績の伸びが十分に期待できるので、とくに現時点で慌てる必要はないが、学習計画に沿って着実に基礎力を固めていくことが高3生の追い込み段階での成績の大きな伸びの土台となる。

センター試験の形式・内容に慣れるのと並行して教科書の順番に沿って各地域・各時代の基本的な流れをしっかりと把握しよう。現時点では時間軸に沿ってタテの流れをまず押さえることが重要である。これがしっかりと身につけていない段階で同時代のヨコの歴史の整理に入るとかえって混乱してしまう危険が大きい。時間はたっぷりあるのだから焦らず着実に学習を進めていってほしい。

(3) 年号を把握し有力な武器としよう。

最近のセンター本試験では年代整序6択問題や年表補充問題、時期指定問題など時代の前後関係を問う設問が頻出である。中にはある程度細かい年代の把握を迫る設問もある。この種の設問への対策としては、重要事項の年号自体を記憶するのが実は一番の近道である。いくつかの基本事項の年号がしっかりと把握されていると、そこを手掛かりとして時間軸の流れが非常に理解しやすくなるとともに、同時代の出来事も一層把握しやすくなる。

(4) 立体的学習に留意しよう。

センター本試験では地図・図版などを使った出題も頻出である。教科書の他、図説・資料集等を用いて常に地理的また視覚的理解を合わせて行うことが不可欠である。その他、文化史もセンター試験で頻出であり、その時代背景としての政治や経済・社会と関連づけて事項を把握するのが効果的である。